



## ‘2010年’の決意 ギフチョウが消えた里山から

大阪府立園芸高等学校 3年 春木 貴志



「2010年春、能勢町のギフチョウは絶滅しました。」

それが、能勢ギフチョウを守る会の元会長Kさんの最初の言葉でした。

ギフチョウは、日本の固有種の蝶でレッドリストでは絶滅危惧種2類、隣の京都府では天然記念物に指定されているとても貴重なチョウです。大阪府では北部の能勢町と豊能町にわずかに生息していました。早春の山野に優雅に舞うその姿から「春の女神」と呼ばれています。そのギフチョウの舞う姿が、今年から能勢町で見られなくなったのです。



能勢のギフチョウは、1998年から能勢ギフチョウを守る会によって保全活動が行われており、産卵期にあたる毎年4月から5月にかけて卵塊数や幼虫の食草であるカンアオイの生育調査が行われてきました。

私もその活動に、昨年の春に参加しました。しかしギフチョウの卵塊どころか卵を一つも見つけることはできませんでした。それに幼虫のエサとなるカンアオイが小さく群生もありませんでした。

「このままじゃ能勢のギフチョウは危ないぞ。」私は小さなカンアオイを見て思いました。その後私はカンアオイについて調べてみました。カンアオイは落葉樹林帯に生育し、能勢の栗林はカンアオイの生育に最適であることを知りました。しかし栗林で生計を立てるのが難しくなり、次々とスギやヒノキ等の針葉樹へと植え替えが進んだのです。この様な一次産業の衰退による里山の崩壊、加えて田畑の区画整理や新規道路の整備、変電所の工事がカンアオイの自生地減少に拍車を掛けてしまったのです。急激な環境の変化によりカンアオイが減少し、山野草として人気のカンアオイはマニアにより盗掘され、こうしてエサや住処を奪われ、2010年春、ギフチョウは能勢町から絶滅したのです。

生物多様性という言葉をよく耳にします。私はギフチョウを通して里山の変化により生物多様性・生態系が崩壊していることを知りました。能勢町は、キマダラルリツバメというチョウの大阪府唯一の生息地でもあります。このチョウは、幼虫時代をアリに育てられるという珍しい生態を持ちます。このまま里山の環境が破壊され続けるならば、このチョウもギフチョウと同じ運命をたどるかもしれません。

現在起きている生態系の崩壊、生物の大量絶滅は過去40億年間の大量絶滅とは比べようにならないほどの速度で進んでいるといいます。ミツバチなどの人間に直接利益を与えてくれる生物が減少すると、人々は保護活動を盛んに行い、人間の生活に直接関りのない生物の保護は後回しの状態です。確かにギフチョウは人間に金銭的な利益をもたらしてはくれませんが、ギフチョウもミツバチも生態系の一部であることには変わりはないのです。これ以上、種の多様性を



失われないようにするには、損得を超えた活動が求められるはずです。

Kさんは、向かいの山を指差しながら、「ほら山の山腹あたり、若い杉林がわかるかなあ？あの辺まで全部栗林だったんだよ」「あの山には、カンアオイがたくさんあってね・・・」と教えてくださいました。その山も、ギフチョウの生息地であることが隠されたまま企業へと売却され、ギフチョウの絶滅を加速させたのです。まさしくそれは「コモンズ（共有地）の悲劇」です。「変電所が出来て。その工事が原因でギフチョウは絶滅したのですか？」私は質問しました。Kさんは「原因の一つではあるけれど、遅かれ早かれ能勢のギフチョウは絶滅しましたよ。もう村は昔の姿をしていない。里山とは名ばかりで今の能勢の里山は30～40年前の里山ではなくなってしまうんですよ。一概に変わるのが悪いとは言えないけど、もう取り返しが見つからないところまで来てしまったんじゃないかなあ」。

一定のサイクルを持った農業活動により維持されてきた里山には、豊かな自然、多くの生き物が生息してきました。しかし産業構造の変化や一次産業の衰退により、能勢町の重要な産物である栗の栽培は放棄され、針葉樹林へと変わり、生物の宝庫だった里山の景色は徐々に悪化し、変電所の工事が絶滅を決定的にしたのです。

「一年くらい発生が見られなくて、絶滅と決めてはいけない。10年、20年発生が確認できないときが絶滅である」と、能勢ギフチョウを守る会の顧問の一人である大学教授は言われたといいます。Kさんは言われました。「卵がないのに保全活動にも力が入らない・・・」と。

ギフチョウが再び能勢町の里山を優雅に舞う日は来るのだろうか？私はギフチョウの成育調査でギフチョウを見つけることはできませんでした。ですが私はようやく樹木の多様性を守ることでそこに暮らす生物の多様性が守られるということを知りました。ギフチョウを保全していくには、食草であるカンアオイの生育できる環境を作っていくことが必要です。そのためにカンアオイをシカから守るために柵を設置し、草刈など里山の維持活動をしていけば、カンアオイの生育数は増え、能勢町にも再びギフチョウが戻ってくる・・・かもしれません。私は、いつの日かギフチョウがウワミズザクラの花に止まり、蜜を吸う。そんな姿を見ることが出来る事を、信じたいと思います。

昨年夏に、森の聞き書き甲子園に参加したのを機会に木を植えること、森を育てることの意味を考えてきました。その時に、「森を育てることは、生物多様性を守り育てるために大切な事だ」という話を聞いたときには、その意味が良く理解出来ないままに、エネルギー消費の無駄を少しでもなくす生活を心がける事ぐらいしかないと考えたものです。そして、能勢町のギフチョウを守る活動に参加し、その現実を知ったことで、今後の私の進むべき道が見え始めました。キーワードは生物多様性の保全です。ボランティア・専門家、形はどうであろうとこの活動に関する生活を送りたいと考え始めています。国際生物多様性年であり名古屋でCOP10が開催される記念すべき2010年は、私にとって大阪府能勢町でギフチョウの姿が見られなくなったという記憶が残され、そして決意の年となりました。

今後も、このギフチョウの保全活動にかかわりながら、生物多様性の保全に携わる仕事について考えてみたいとおもいます。そのために私は今後、大学に進学し、持続可能な農業と生物保護について学び、大阪の里山をギフチョウの舞う里にする事を夢に生物、環境保全の第一線で活動していけるような人間に成長していきたいと思えます。

